



No. 148

ティークレイク

Tea Break

スウィートメモリーミックス

会員 正林 真之

妻に誘われて、家族で銀座の甘味処に食べに行く。その店は、ちょうどサンデー日経の特集で一位になったということもあり、結構な盛況であった。けれども、妻に言わせれば、その店は、新聞で有名になる以前から通っていた店であり、ある意味では思い出深い店であるという。

むろん、銀座であるから、ある意味ではかしこまった店である。自分自身も初めてであるし、少し前までは永遠に縁が無かろうと思っていた場所でもある。しかしながら、まだ小学生の子供たちにすれば、そんなことは全く関係無い。黙って座らせることだけでも、相当に大変である。餡蜜やカキ氷の類等、用意して持ってくるのにそんなに時間はかからないのであるが、子供らと悪戦苦闘をしていると、そんな短い時間ですら、とても長く感じる。

そんなこんなで子供たちと悪戦苦闘するも、餡蜜やカキ氷が来れば、多少はおとなしくなる。両親はともに大の餡子好きだということに、当の子供たちは全く食べない。自分らの遺伝子は一体どこに言ったのやらと思いつつながら、注文をした餡蜜が来たので、それを食べてみると、やはり美味しい。

実は、妻がその母親と来た思い出の場所だということで、その甘美な記憶が更に味付けをして、現実以上のものとしているのだと思っていた。けれども、さすがに、当のお店の名前を冠した餡蜜であり、日経の特集で評判になるだけはある。子供たちとの悪戦苦闘のことはすっかり忘れ、ただただその美味さに感動をしていた。

その翌週の週末に、たまたま一人となる時間ができたので、これ幸いにと例の甘味処に行き、例の餡蜜を注文してほくそ笑んでいた。何につけ、隠れて食すのは結構美味しいものなのである。ところが、どうしたことか、あの最初に食べたときの感動が無い。全く同じものだというのに、先週ほどには美味しく感じないのである。

科学的に分析するならば、例えば子供たちに気を遣っ

ただ消費された血糖が補われる形になるから美味しく感じるとかいった解釈をすることもできよう。ただやはり、こういったものは、確実に、一人で食べるよりも皆で食べたほうが美味しいのだ。同じものでも、一人で食べるのと、皆で食べるのとでは、味が違うのである。

そういえば、義父と同じく、連れ合いに先立たれた私の父も、他愛の無い食事にも、何かと我々を呼びたがる。これはただ、寂しいというだけではなく、同じ食事でも、味が違うからなのではなからうか。そんな気すらしてくる。父にとっては、ごくたまに旧家族でとる食事というのは、餡蜜以上に甘いものなのであろう。

かくいう餡蜜は、全く味のしない寒天と、濃い味だけの餡子の組み合わせである。そこに、ちよっぴり塩味の豆がアンサンブルとして加わっている。これらが不規則にごちゃっと入っているのが、餡蜜である。であるから、全体的に甘いものであるにしても、そもそも、食すごとに微妙に味が異なるものである。

けれども、一緒に過ごした人たちとの思い出というのは、まさにこの餡蜜のようなものではなからうか。

ところで実は、かの店は、妻にとっては、いまや故人となってしまう彼女の母親と、待ち合わせの際に、よく使った店だという。この二人は非常に仲が良く、一卵性親娘とすら言われていた。

その一卵性親娘が引き離されて早7年。今年は何回忌である。果たして、今家族となった我々と食べるその味と、今は亡き義母と食べる味とで、同じくらいにはなったのだろうか。

そうであるといいという思いに加え、今この目の前でこころと遊んでいる子供たち。この子らが大きくなってこの味を思い出すときには、是非とも実物以上の甘みとなって思い出されんことをと、つくづくそう思うのである。